想定外の事態を経て社会人が考えた、「これから」の社会で求められる資質・能力

新型コロナウイルスの感染拡大は、生活様式や働き方にも大きな影響を与えている。それまでのあたり前が通用しなくなった状況を経験した大人たちは、これからの社会では、どのような資質・能力が求められると考えたのか。かつて本誌に登場した若手の社会人を訪ね、話を聞いた。

学校、そして社会に育てられた私たちが考える、「これからの社会を創る人たち」に必要な力

依田浩崇（よだひろたか）さん／太田絵梨子さん

よだ・ひろたか　福島県立安積（あさか）高校卒業。東京大学法学部卒業。同大大学院教育学研究科修了後、文部科学省に入省。文化庁に在籍し、文化財保護に関する業務に携わる。
おおた・えりこ　福島県立安積高校卒業。東京大学教養学部を経て、現在、東京大学大学院教育学研究科博士課程に在籍。研究テーマは「深い理解を促す授業と宿題の連動」。

予測困難だからこそ未来は自分で創るもの

依田　2011年に大学1年生だった私は、今年、社会人5年目を迎えました。私の故郷、福島県に甚大な被害をもたらした東日本大震災の発生以降、熊本地震を始め、想定外の事態を私たちは数多く経験しました。新型コロナウイルスの感染拡大もその1つと言えるでしょう。私が東日本大震災を通じて考え、学んだことを、そうした想定外の事態に生かせたなら、それは福島県民として育った私の、社会に対する恩返しになるものだと思っています。社会人になってキャリアを重ね、自分の行動が社会に与える影響が大きくなるほど、想定外の事態に対して自分なりにできる行動を模索する思いや責任感が強くなっています。

一方で、想定外の事態に向き合う時、私は、自分に足りないものを自覚し、他者の言葉に耳を傾け、他者の力を借りてよりよい答えを見つけようという意識も強くなりました。そうした変化は、仕事を通した私の成長だと思います。私が現在携わっている文化財保護という仕事は、所有者や修理技術者、観光・地域活性化に携わる方など、様々な立場の人がかかわっていて、時に考え方や利害が異なりますが、地域や社会の未来をよりよくしたいという思いは皆に共通しています。そうした環境で仕事をする中で、他者の言葉に耳を

傾け、納得解を得る大切さを学んだのだと思います。さらに、仕事を通して、日本が誇る伝統や急速に発展するＩＣＴなど、自分があまり目を向けてこなかった領域に大切なものがたくさんあることに気づき、視野の広がりを実感しています。自分の不足を自覚することが、学び続ける原動力になっています。

「未来を予測する最善の方法は、自らその未来を発明することだ」という言葉があります。10年後の社会を予測することさえ困難ですが、どのような社会にしたいのかを考え、その実現に向けて自分にできる行動を選択することはできます。新型コロナウイルスが今後社会をどのように変えていくのかが分からないからこそ、この難局を乗り越えるためには、理想の社会像を描く力が必要だと思うのです。高校時代、「君はどう生きたいんだ？　今、君は何をするべきなんだ？」と問いかけ、私と対話してくれたのは、母校の恩師でした。その時初めて、未来は自分で創るものなのだと、私は学びました。

未来は予測困難だからこそ、先生方には、「君はどう生きたいんだ？」と生徒に問いかけ、分からないことへの向き合い方を、先生自ら示してあげてほしいと思います。

解決すべき問いに謙虚に向き合う学びの経験を

太田　大学院での私の研究テーマは、「宿題」です。これからの社会で求められる資質・能力を育む家庭学習における課題のあり方とはどのようなものなのかを研究しています。元々、宿題の是非については議論が絶えず、宿題不要論も多く見られました。しかし、今回の臨時休業を機に、宿題が子どもの学習の中で重要な役割を担ったため、家庭学習における課題のあり方について改めて考えた先生も多かったと思います。宿題というと、授業で達成しきれなかった知識・技能をドリル練習で補うといったイメージが持たれがちでしたが、今後も休業の可能性がある中、自立的に学ぶ態度やスキルを育てる機会として宿題を捉え直す必要があると思います。

私にとって、今回の想定外の出来事は、自分の研究がこれからの社会においてどんな意味を持つものなのかを考える機会になりましたが、同じように誰もが自分の目の前にある様々なあたり前について、その意義や価値を捉え直す機会にできるのではないでしょうか。思えば、東日本大震災も、私の社会への向き合い方を大きく変える出来事でした。高校時代の私は、日々の学習のことで頭がいっぱいでしたが、震災を経験して、社会のために自分に何ができるのかを強く考えるようになり、社会で起きている様々な問題に目を向けるようにもなりました。大学時代は、経済的に困窮した家庭の学習支援に携わりました。本人に原因はないのに学習が困難な状況に陥るという理不尽な社会の状況を少しでも変えたいと思ったからです。そうした思いを今も抱き、大学院で学んでいます。大学院での研究は、先人たちが積み上げてきたものの大きさと、それに

東日本大震災の被災地となった福島で育った者として、「私たちの未来のために今、私たちにできること」を東京大生だった依田さん、太田さんが語ってくれた

本誌 2012 年 6 月号の特集では、5 組の高校生、大学生に「東日本大震災を契機に何を考え、今をどのように生きているのか」を語ってもらった。当時、東京大学の 2 年生だった依田さん、太田さんは、地元・福島から難関大学を志望する後輩のために企画した合宿セミナーにおいて、中心的な役割を担った。2 人を動かしたのは、「たくさんの人に育ててもらって今の自分たちがある。だからこそ、その恩返しとして、地元の後輩たちにできることをしてあげたい」という思いだった。

『VIEW21』高校版 2012 年 6 月号・特集
「他者のために学ぶ―震災から1年後の、生徒と教師―」より。
https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/02toku_0334.pdf

進路に悩んだ私を支えてくれた恩師の姿から、想定外をともに乗り越える人とのつながりを考えた

吉田梅乃（うめの）さん

比べた時の自分の小ささを、私に教えてくれました。自分の小ささを自覚したことで、社会に対してもより謙虚になったと思います。

予測困難な社会においては、自分なりに解決すべき問いを見つけ、そして自分の小ささを自覚しながらも、その解決に向けて自分に何ができるのかを謙虚に考えることが、私たちに求められるのだと思います。それは、高校であれば、まさに探究学習の中で経験できることです。例えば、地域課題をテーマにした探究学習であれば、これまで地域の人たちが積み重ねてきたことに向き合い、地域に生きる1人として自分に何ができるのかを考える機会になるでしょう。探究学習を始め、高校の教育活動を通じて育まれる資質・能力は、社会を変える源になると、私は信じています。

先日、安積高校の恩師から、「福島の子どもたちのために、一緒に活動しないか」と連絡をいただきました。自分が学んできたことを、未来を生きる後輩たちに還元することができそうで、とても楽しみです。

困難に直面した時、私たちは仲間のために動けた

私は、今年4月から社会人になりました。肩書きはキャリアナビゲーターで、国家試験や各種資格・検定試験に挑戦する人たちに学習プランを提案したり、カウンセリングを通じて仕事や学習のモチベーションを高めたりしながら、ありたい自分を実現できるようにサポートするのが私の仕事です。高校の恩師には、就職の報告の時に「進路指導部の先生のような仕事です」と説明しました。

この仕事に就こうと思った背景には、高校の恩師の存在がありました。進路の目標を見失った私に寄り添い、私の未来について一緒に考えてくれた恩師の姿がずっと心に残っていて、私も誰かの目標や生き方をともに考え、見つけ、その人がそれを実現できるように後押しする仕事をしたいと思うようになりました。

ただ、私の社会人としての生活は、新型コロナウイルスの感染拡大によって、想定外のスタートになりました。新入社員研修はすべてオンライン上で行われ、同期社員や先輩社員とパソコンの画面越しのコミュニケーションが続く毎日……慣れない環境で疲れや不安が募っていました。そんな私を救ったのは、同期社員とのつながりでした。同期社員が声をかけ合い、研修時間外にオンライン上で自主的に集まり、将来の夢や今の気持ちなどを語り合うようになったのです。そうして、お互いの内面を打ち明けるうちに、「先輩社員をゲストに招いて、ざっくばらんに仕事の話を聞いたらどうだろう」などと、仲間のための企画が同期社員から出てくるようになりました。ストレッチなどの知識があった私は、オンライン研修の合間のボディーケアの指導役を担いたいと上司に申し出ました。

あの時、仲間のために何かをしたいという思いがみんなの中に生まれ、同期社員のコミュニティーをよりよくするための工夫や提案を、それぞれが持つ強みや知見を生かしながら行っていました。自分1人では乗り越えることが難しい困難に直面した時に、お互いを助け、高め合っていける関係を築くプロセスを、当事者の1人として目のあたりにできたことは、有意義な経験でした。

内面をさらけ出せた場所は自分にとっての居場所になる

なぜ、想定外の事態をみんなで乗

り越える関係が生まれたのか。会社のミッションに共感し、未来を創る同志としての信頼で結びついた仲間だったことは、理由の1つでしょう。「変えられないことではなく、変えられることに注力しよう」という会社の行動理念が、私たちに既に浸透していたということもあるでしょう。ただ、みんなで困難を乗り越える力は、高校生活の中でも培われ、発揮されていたようにも思います。高校時代、同じ目標の同級生とグループをつくり、お互いを励まし、競ったこと、部活動や学校行事では自分たちをよりよい状態にするために様々な提案をしていたこと……。

会社や学校で、みんなのために行動ができたのは、そこが自分の居場所だと思えたからではないでしょうか。高校時代、進路に悩む私を見放さず、恩師がいつも声をかけてくれたから、学校は私にとって「居てもよい場所」でした。だからこそ、その場への恩返しとして、自分ができる貢献は何か考えるようになり、失敗を恐れずに様々なチャレンジや提案ができたのだと思うのです。

予測困難な社会を生き抜くために私たちに必要なことは、人とのつながりの中で生きがいや働きがいなどを見いだしながら、自らを生かす力だと思います。ただ、そのためには自分と向き合うことが欠かせません。高校時代の私は、恩師がそばに居てくれたから、自分の嫌な感情や頑張れなかったことにも逃げることなく向き合い、自分自身と対話をすることができました。

今も高校生の中には、部活動の大会の中止など、想定外の事態に困惑し、苦しんでいる人がいると思います。でも、先生や友人とのつながりの中で、自分の内面に向き合い、思いを吐露することができる学校は、「居てもよい場所」です。そして、その場所では、みんながみんなのために変えられることを変えようと注力する……私はそう思うのです。

よしだ・うめの　富山県・私立片山学園中学校・高校卒業。大阪市立大学生活科学部人間福祉学科卒業後、株式会社リンクアカデミーに入社。パソコンスキル獲得や各種資格取得などを通じたキャリアアップ支援に従事。

自分のあり方・生き方を考え続ける力が、高校教師とのどのようなかかわりの中で育まれたのかを、大学生時代に吉田さんが語ってくれた

本誌 2018 年 12 月号の特集では、予測困難な社会を生きる高校生の進路選択のあり方と、それを支える教師の役割について、4 人の大学生がそれぞれの高校時代を振り返りながら、高校教師、大学教授と語り合った。大学生の 1 人として座談会に参加した吉田さんは、小学校の頃から高校に入るまでずっと医学部志望だった自分が、勉強や進路に悩むようになり、担任の教師と面談を重ねる中で、自分の本当の興味・関心を見いだしていった経験を語った。

『VIEW21』高校版 2018 年 12 月号・特集
「『社会』に開かれた進路指導――多様な他者とのかかわりの中で」より。
https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/VIEW21_kou_2018_12_interview.pdf